

3 比べない幸せ

童謡詩人・金子みすゞの詩を力強い筆遣いで表現した作品や、ニューヨークでの個展開催が話題になっている金澤翔子さん。今日は、ダウン症の書家として知られる翔子さんと、彼女を書道へと導いた母・泰子さんのお話です。

翔子さんは、生後五十二日でダウン症と診断されました。母の泰子さんは「今日、私は世界で一番悲しい母親だろう。」とその日の日記につづっています。一生、誰かに支えてもらわなければ生活できない娘の未来に、当時の泰子さんは希望を見いだすことができませんでした。

小学校では何をしても最下位。でも、一〇〇メートル走でラストのテープを切って「二二二」している娘を見て、泰子さんは「ピリをちゃんとやるのが、この子の役目なんだ。」と、ありのままの翔子さんを認める決心をします。

「親子で苦しんできたと思っていたけれど、翔子はダウン症で生まれた自分を不幸だなんて思っていない。もがいていたのは親の私だけ。他の誰かと比べなければ、翔子は障害者じゃないんだよ。」

と、泰子さんは語ります。

変化のきつかけは、泰子さんの手ほぐきで五歳から続いていた書道でした。一度限りのつもりで開いた個展が話題になり、各地から個展を開く話が次々に舞い込んできたのです。個展では、翔子さんの作品の前で涙を流す人もいました。書道歴五十年の

泰子さんは、

「書けば私の方がうまいかもしれないけれど、私の作品ではそこまで感動はしてもらえません。」

と笑います。翔子さんの書には、人の心を動かす力がありました。二〇一四年、北九州市で開かれた講演会で、泰子さんは、今の自分たちがどれだけ幸せかをこんなふうに語りました。

「翔子に『お母様、幸せ？』『お母様、楽しい？』と聞かれて、二十六年たつて紆余曲折あつて、『日本一幸せだよ。』って言えたんですね。」

と。自らを「世界で一番悲しい母親」と記した日記からは考えられないことです。

「生きてさえいれば、絶望がない。」

泰子さんは講演会の最後を、自ら実感したそんな言葉で締めくくりました。

人は、幸せへとつながるそれぞれの可能性を持っています。一人一人の違いが、個性として尊重される社会をつくっていかたいですね。

では、また。